「津波対策マンション」の建設

東日本大震災の復興では、岩手、宮城、福島と続く「万里の堤防」と言われる８０００億円の工事がすでに進められてる。堤防は高さを増し、無人となった地域にも及んでいる。

以前のテレビで政治家が「近いうちに必ず起きる、南海トラフ地震の津波を想定すると、高さ１５メートルの堤防を太平洋側に巡らすことになる」という。その費用がおよそ十兆円。日本全国を想定すると数十兆円になるという。

そうだとしたら、わが国は海に恵まれながら、そそりたつ壁のような堤防のせいで海も見えず、川も河口から中流までもがコンクリートで囲まれてしまう。そして大事な景観や自然に対する配慮が全くされていない。三陸海岸もほとんどが国立公園なのだ。漁師たちも高台に家を建て海に通っている。

わたしは津波の被害が大きかった気仙沼市の出身だ。もしあの津波が深夜に起こっていたら、相当の人が逃げ遅れたと思う。

津波の翌朝の、テレビは各地の惨状を伝えていたが、ほとんどの家が流された中で、ただ一軒だけ無傷で残った家があることを伝えていた。

それは二階建てだが、一階は何もない四隅をかなり細い鉄骨が支えているだけだった。そこを駐車場として利用し、住人は二階に住んでいた。ご主人の話では、津波は一階の天井まで何度も達したが、結局通り過ぎるだけで、何も被害は無かったという。

ここには津波対策の大きなヒントがある、そう考えた私はそのうち、なぜこの家だけが残ったのか、そのうちに検証する番組があるだろうと思っていたが、実際は無かった。そこで自分なりに津波に対策下マンションを考えてみた。

それは海に正対して建つ、１０階以上の近未来的なマンションである。その４・５階までを中空にする。建物を支える柱の先端を船首のような形にして、波を切り裂くようにする。柱の後部も同じ形にして、引き波に備える。津波が来ても堤防のように抵抗するのではなく、船首のようにして受け流すという考えだ。エレベーターもその内部に持つ。

居住スペースは、津波の最高到達点より上になる。すると寝たきりの人や、深夜寝込んでいる時に津波が来ても、そのままでいられ避難する必要がなくなる。生命も財産も失わずに済む。

このマンションの階下の中空となるスペースは、駐車場、体育館、幼稚園などの施設に利用する。ここは万一の津波の時は流されるようにして、本体が残

るようにする。すると津波の時は、上に上がるだけでよい。屋上には立地を利用して、太陽光、風力などの発電設備を備え、必要ならヘリポートがあり、インフラは地下に設けて、通信も確保する。今までの技術で建設は可能だ。

このようなマンションを海岸線に並べて、屋上を遊歩道でつなぐ。そのまわりは公園、広い道路、耕作地などにする。堤防は元のままでよいことになる。そして新しい堤防の建設費でこのマンションを建設すればよい。

さらに、津波で悩むのは日本ばかりでは無い。まず一棟を建設してみて、専門家などにより審査いただき、有効性が検証されたら、海外でも使いたいと思う。

イメージとしてわかりやすい別紙をご覧ください

■ 津波対策マンションの建設 ■

今後、津波が想定される地域の海岸に、津波に備えた以下のような構造の集合住宅群を建設する。